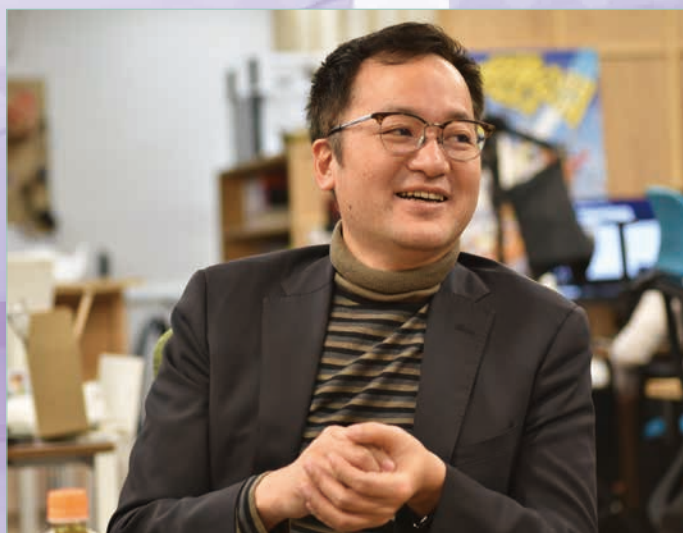


編集長就任にあたって 情報処理 X



稲見昌彦 | 東京大学 先端科学技術研究センター / JST ERATO

このたび6代目の会誌編集長の職を拝命いたしました。編集委員としての経験豊富で大きな仕事をなされた塚本編集長とは名前の「昌彦」くらいしか共通点がなく、会誌に関して思い返すと遅筆のあまり、多大なるご迷惑を編集委員の方々におかけした思い出ばかり。編集長になり執筆をお願いする側に回ることで、少しでも今までのカルマを清算できればと考えております。編集長をお引き受けしたものの、エンタテインメントコンピューティング研究会やIPJSJ-ONE、ニコニコ学会βなど、デジタルメディアを活用した取り組みに関してはある程度経験がございますが、紙メディアの編集の経験は一切なく、不安を乗り越えてむしろ新鮮な気持ちで取り組む所存でございます。会員の皆様、何卒よろしく願いたします。

さて、本会誌には歴代の編集長の下、常に新たな取り組みにチャレンジする伝統があります。このたび新編集長として、会誌の役割を1) 社会と繋ぐ、2)

領域を繋ぐ、3) 世代を繋ぐメディアと捉え、繋がる、掛け合わせるという意味を込め「情報処理 X (エックス)」と称した新たな取り組みを行いたいと思います。

現在の社会において情報処理は一技術分野でなく、すべての産業においてなくてはならない技術となっていることは言を俟ちません。そこでまず、情報処理を主に専門とする読者だけでなく、情報処理技術の動向を知りたい非専門家や、学びたい初学者、教えたい教員に向け、フレッシュマンコースや学校での講義素材となるような記事を企画します。また、漫画やソーシャルメディアなどポップカルチャーを活用しつつ潜在的な読者層に広く発信します。

次に、情報処理やその隣接分野に関する記事だけでなく、たとえば「料理と情報処理」「紅白と情報処理」「終活と情報処理」など、情報処理という分野を超え、多くの領域と繋がる情報処理技術に目を向けた記事を増やします。

さらに、世代を繋ぐ試みとして、会誌編集委員会に現役学生を主とする次世代分野専門委員会(NWG: Next generation Work Group)を新設し、学生の学生視点で情報処理に関する情報を発信し、学生会員、潜在的な学会員、企業や学術の若手研究者に向けた記事を増やすことを検討しています。一方、学会 Web サイトに「コンピュータ博物館」があるように、歴史的な研究の紹介やシニア研究者のインタビュー記事など、情報処理の歴史と未来とを繋ぐような記事を企画します。

さて、情報処理分野における国際会議の一層の役割向上とともに、国内ではほとんど発表を行わない若手研究者も散見するようになり、本会をはじめとする国内学会の意義が問われ始めています。かつての日本で文語が漢語であったように、現代の科学・技術分野において文語は英語となりつつあるようです。そのような状況において、論文誌が自慢の成果

の世界への発信であるなら、会誌は日常生活、地域の文化に根差した議論や、悩みや失敗を、口語としての日本語で共有できる場、つまり日本最大かつ最高の「情報系同人誌」を目指したいと思います。

不慣れな編集長ではありますが、会員各位からも特集記事、解説記事の要望を募りたいと考えていますので、ソーシャルメディアやメールなどで忌憚のないご意見をお寄せください。

それでは新任編集長としての記事が出る5月号より、よろしく願い申し上げます。

(2018年2月8日)

稲見昌彦 (正会員) drinami@star.rcast.u-tokyo.ac.jp

東京大学先端科学技術研究センター教授、博士(工学)、電気通信大学教授、慶應義塾大学教授等を経て現職。JST ERATO 稲見自在化身体プロジェクト研究総括、超人スポーツ協会発起人・共同代表。著書に『スーパーヒューマン誕生!』(NHK出版新書)がある。